

## 「きつと月だけがしるオーバード」

### ▼導入

気づけば、晩夏と言われる期間も後少しで終わり、秋はもうすぐそこだ。しかし、未だ照りつける日差しは暑く、寝苦しい夜も変わらない。

そんな日々の中で、きみの隣にいる人魚は、少しだけ遠くの方を眺めて、物思いにふけることが多くなつた。

そのことを問うても、曖昧に微笑むばかりで、結局、そのうち話してくれるか、時が解決してくれるだろうと思う他なかつたのである。

.....

眼裏に感じる光の眩しさと、暑さをいよいよ無視できなくなつて、きみは眠りから目覚めた。

〔DC〕はきみのかたわらですやすやと穏やかな寝息を立てている。

とりあえずベッドから抜け出そうと動けば、〔DC〕は小さくうなつた後、うつすらと目を開いた。

「.....おはようございます」

「ご飯、ご飯.....」

きみたちは完全に寝起きの様相で、とりあえず朝の支度と朝食を準備しようと動き出した。

### ★着替え

- ・ 似合う服を選ぶことができるか
- 〔アイデア〕／〔APP\*5〕など
- ・ 選んだ服のサイズが比較的丁度良いか
- 〔幸運〕

### ★朝食作り

- ・ 作りたい料理の材料があるか
- 〔幸運〕
- ・ 手際よく調理ができるか
- 〔DEX\*5〕／〔料理系技能〕
- ・ 綺麗に盛り付けることができるか
- 〔DEX\*5〕／〔APP\*5〕

## ▼散歩

朝食を食べ終えて食器類を洗い、一息ついた頃、[KPC]は外を見た後、きみを呼んだ。

「[PC]、天気がいいですよ。散歩に行きませんか？」

「波も穏やかだし、浜辺を歩いてもいいかも」

了承すれば、[KPC]はきみの手をとって外へと向かう。

頬を撫でる潮風も、目前に広がる海も、気づけばきみにとって慣れ親しんだものになりつつある。

砂浜へ降りると、[KPC]はバツときみの手を離して駆け出した。

靴を脱いで波打ち際まで行くと、寄せては返す波の行手をさえぎりながら歩く。

「[PC]もどうですか？ 冷たくて気持ちがいいですよ！」

「せっかくだから、ちょっと遊んで帰りましょう！ ね、いいですよね！」

「貝殻とか、漂流物探しても楽しいですし！」

【KP情報】了承すれば[KPC]は喜ぶ。そのまま帰ってもいい。帰らないでほしいが……。

## ★散策

1d100で出た目によって見つけられるものが変わる。  
KPCとPCでそれぞれ2回まで挑戦できる。

●1↖5―燦んだ指輪

↓どこか不思議な気配を感じる燦んだ指輪。

●6↘25―シーグラス（2回目は黄色いシーグラスが手に入る）

●26↘50―綺麗な貝殻

●51↘75―ヒトデ

●76↘94―いい感じの流木

●95↘100―おおよそ魚類だろう死骸を見つける。

白く濁ったぎよろりとした眼がきみを見る。……いや、見られてるわけがない。ただの死骸だ。しかし何故か、得体の知れない悍ましさを感じてしまう。 SANC1/1

d3

【KP情報】 煙んだ指輪と黄色いシーグラスは、AFのなり損ないのようなもの。最後の戦闘で補正を与えられるアイテム。

その他は特に何もない。致命的失敗を出した場合は、深きものの残骸を発見する。  
好きなだけ遊んだら次へ

〔幸運〕 失敗した場合はKPCのみ気づく

・成功 誰かに見られている気がする。

・失敗 突然、[KPC]がきよろぎよるとあたりを見回しはじめた。

「いま、誰かに見られていたような……」

しかし、今自分の周囲にあるのは、海と少し先にある岩礁くらいだ。人影らしいものはみあたらない。

「前にもありましたよね。ほら、わたしが捕まった時の、その帰りに」

「それに、こういうの最近、頻繁にあつて……。[PC]が仕事で、わたし一人出歩いている時とか」

「またよくわからない信者関係かなつて、放置してたんですけど」

「一度、槇島さんに聞いてみた方がいいかもしれませんね」

「……とはいってもまだ朝なので、街で買い物とかして、帰るついでに寄るとか、そんな感じにしましょう！」

「お金とつてきます！」と言つて[KPC]は家まで戻つて行く。

お金と言うと例の封筒だろう。

今月も変わりなく送られて来たそれに、結局きみがどんな感情をもっているかはさておき。[KPC]は、来るなら使おう！といつも乗り気で持ち出してくる。

暫くまてば、買い物用のエコバッグと共に[KPC]は戻つて来る。

「いきましようか！」

そういうと、きみの手を握つて街へと歩き出した。

## ▼住民の異変

街は移住者によって、以前より少しだけ賑わっている。  
あの騒動以降、これといつて問題もなく、住民はみな優しい。……優しすぎる程に。

暫くは一部の住民から様子を伺うかのような、どこか恐々とした対応をされたのだが、時間の経過と共にそれも薄れた。

それ以降は、やけに恭しくなったり、神聖視する様な言動が多くなったりと、徐々に陶醉するような様子を見せていた。

過激に信仰していただろう住民が主だった為、[KPC]もまあいいかと諦めて、特に何か言う事はなかったのだった。

## ■探索箇所

広場／商店街／喫茶店

これ以外にも自由に場所を追加して良い。

## □広場

街の中心にある円形の小さな広場。

中心に噴水があり、その周囲にささやかながら花壇がつけられている。

街路樹がせめて木陰になる様にと、円の外に等間隔でベンチが配置されており、休んでいる住民もみられる。

〔聞き耳〕KPCは聞こえているPCが失敗した場合、教えてくれる。

・成功 通りかかった住民たちが「今日もお元気そうでいらつしやる……」「楽しそうに微笑まれて……」と小声で話しているのが聞こえる。

・失敗 通りかかった住民たちが、ひそひそと何かを話している。害意などはなさそうだが……。

「なんか、妙な感じですよ。急にこう、恭しいというか……。槇島さんは割と普通なような気がしますけど」  
「何もないならいいんですが……」

## □商店街

それなりに賑わいを見せている商店街。

小さなスーパー以外に個人経営の魚屋や肉屋も存在する。

その他には、薬屋、雑貨屋、喫茶店など、思いつく限りの店は入っている。

何か買いたいものがある場合は「幸運」

- ・成功 望む食材や物が入る。
- ・失敗 偶々売り切れている。代用できる物や似た物が手に入る。

#### □喫茶店

裏路地にひっそりとある喫茶店。

モーニングサービスだけでなく、昼食にぴったりのメニューもある。

店内はレトロモダンなインテリアで纏められており、落ち着いた雰囲気漂わせている。

数名の客がいるが、一度ちらりとときめたちを見たくらいで、特に何か囁かれる様なことは無い。

いつかのカフェ同様、よつぽど珍しい料理でなければあ

ると思っいいい。

注文を終えれば、暫くの後、頼んだものが運ばれてくる。特に何事も起こっていない店内だが、[KP]はうろうろと視線を彷徨わせている。

「なんかみんな、普通だなと……」

「そりやそうですよね。みんながみんな、よくわからない信仰しているわけじゃないですもんね」

「割と日常と化しているので、普通の反応をされるのも、少し妙な気持ちになるというか……」

「えっと、とりあえずこの後、帰りがてら槇島さんのところに行きましょう。色々聞きたいし……」

【KP情報】好きなだけRPしたら次に進む。

#### ▼道中

来た道を辿るように、きみたちは歩みを進める。

施設が集まる街の中心から外れると、多少なりとも人影はまばらになる。

そうして歩いている間にも、[KPC]は幾度となく「誰かに見られている」と呟く。

#### 〔目星＋幸運〕

・成功 何気なく見渡すと、フードを目深に被った人が目に入る。見慣れた人々、見慣れた景色に溶け込むように居る人物に、何故かきみは違和感を感じた。

・失敗 見渡しても、誰からという事はわからない。しかし、漠然と見られているとは感じる。

確かに見られている。

そして、自分たちを付けようとしているのは理解できる。

現状、直接的に危害を加えられているわけでは無い。

……人の目があるからかも知れないが。

どちらにせよ、薄気味悪さは感じる。

S A N C 0 / 1

[KPC]はいつもより固い声音で「いきましよう」ときみの手を引いた。

「一人、気になる人を見つけました。けれど、多分、一人

だけじゃありません」

「早いところ、榎島さんの家に行きましよう」

[KPC]はぐいぐいと手を引き、きみは急かされるようにして、足早に榎島の家へと向かう。

【KP情報】深きもの側にいる者は、地形を利用（海）するか、平凡なみせかけ等の術を応用して周囲に溶け込み、二人を監視している。

違和感を感じ取れたのは、実はいつも二人に見える場所で監視していて、無意識に二人もフードの人物を視界に入っていたから。その為、平凡なみせかけに綻びが生じて気づくことができる。

#### ▼榎島の家

榎島の家はきみの近所にある。

インターフォンをおせば、直ぐに応答があり、「おお。今開けますね」と言った後、玄関から解錠音が聞こえた。

「こんにちは、お二人とも。なにかありましたか？」

「ああ、立ち話もなんですから、どうぞ」

そう言つて、槇島は中へ入るよう促してくるだろう。

そのまま、リビングのソファへときみたちを座らせると、キッチンへと向かい、飲み物の入ったグラスを両手に戻つて来る。

「麦茶くらいしかないんですが……」

「実は丁度、夕方頃にお家へ伺おうと思つていたところだったんですよ」

「何故、夕方頃に伺おうとしていたか、わかりますか？」

何と答えても、うんうんと頷いて続ける。

「それはですね……。猶予を与えない為ですよ。祝月の満月だなんて、丁度いいではありませんか」

「少なくとも、今日は[KPC]様の願いを叶えるのに、とても良い日です！」

「忌み月と言われながらも、めでたすぎる月とも言われる正五九月」

「そして、満月。[KPC]様も力をつけていらつしやる今、

これほど完璧なタイミングはなかなかありません！」

槇島は意気揚々と語るが、あまり意味がよくわからない。  
[KPC]の願いとはなんだろうか？と思うかも知れない。

普段からお願いを聞いている立場でも、槇島へ相談する様な願いという事だ。心当たりというものは無い。

一方、[KPC]は……眉を顰めている。

● K P C の 願 い つ て 何 ？

「……あれ？もしかして、まだ[PC]さんに言つて……ない……？なら何故ここに……？」

P C が疑問を口にしなくても、ややあつて[KPC]は自ら口を開く。

「忘れていました。今日が満月だつてこと。ここに來たのはそれではなくて、別件で」

彼／彼女の言葉に槇島は申し訳なきように縮こまると、

「で、ではその別件の話をしてからあらためて……」と、わざとらしく居住まいをただした。

誰かに見られている件や住民の様子について等、槇島に質問できる。

●最近、誰かに見られている気がする

「……。あ！ 恐らくですが、それは流石に信者たちではないと思いますよ」

「実は以前から、似たような相談を教団内からも受けていて」

「これについては、ちょっとややこしい事になっているせいかと……」

「[PC]さんと[KPC]様はこの街が元々崇めている存在を、ご存知ですか？」

「深きものと呼ばれています」

「実際は崇拜するというより、知識や技術を与えてもらう代わりに、彼らの血を絶やさないように手伝っている感じです……」

「そして深きものたちは、また別の神を崇拜しています。もちろん、住民にもそれらの神を崇拜する者たちがいます」

「つまり、まあ、我々の信仰が邪魔で、動向を伺われています」

るか……なにかしようとしてるか……」

「最初は小さな信仰でしたからね。見逃されてましたが」

「……信仰は力になります。[KPC]様の力は、以前より随分強くなりました。信仰する僕たちが影響されるくらいに」

●影響って？

「僕はこれでも、一応、深きものと人間の混血なんです」

「あれ？ 言ってませんでしたっけ？」

そう言って槇島が長袖の裾を捲ると、そこには魚の鱗の様なものがあつた。

人間にはない異質な部分を目の当たりにしたきみは、少なからず驚くことだろう。

S A N C 0 / 1

晒された腕を覆う、鈍色の鱗の中に、（KPCの鱗の色）に輝く鱗が紛れている。

「これが影響ですね。[KPC]様の母である神の信者は、身体に信仰する神と似た特徴を持つたとか」



「[KPC]様のこれは、無意識でしょうが」

【KP情報】 KPCに聞いても、影響を与えたつもりはないと答える。

KPCが彼らを眷属だと認識しているから影響を受けているのではなく、信仰の余波の様なもの。

ちなみに、槇島のKPC呼びは、KPCさんからKPC様へと変わっている。何も変わっていないようで、しっかりと影響を受けている。

● どうしたらいい？

「うーん……」

「とりあえず、ある程度の妨害なり接触なりは覚悟しておいた方がいいでしょう」

「日中は、嫌でも人の目があるのでいいんですが、問題は夜ですね」

「気休め程度になにか、特別な力が込められた護身用の武器とか、あればいいんですけどね」

「無いです！ すいません！」

「僕たちも夜間見回ったりしてみますが……。具体的な策

もなくて、すいません……」

【KP情報】 銀のナイフについて問えば「そんな物があつたんですか……」という反応をする。槇島はナイフについて何も知らない。知らされていない。

とりあえず護身用に持っていたらいいんじゃないかと提案はしてくれる。

● 一部の住民の様子がおかしい

「[KPC]様の力が強くなっている影響ですね。盲目的だった者は、より強い影響を受けているでしょう」

「なに、気にすることはありませんよ！」

【KP情報】 PLが何を聞くか忘れていた場合、KPCから話すようにする。台詞例を参考に自由に話して良い。

護身用の武器云々は、銀のナイフを気づかせる為の言葉。ある程度話したら次へ。

「[PC]さんとの再会、信仰、祝月、満月。今日の夜は、

「[KP]様が街へ滞在する様になってから、最も力が満ちる日です」

「[KP]様が願いを叶えた時、それは[KP]様が、ひとりの小さな神として確立することだと思っ

「あ、詳細はお二人でどうぞ！……とにかく、勝手ながら、僕も願いが叶うのを望んでいるんです」

「それでは！僕は色々と連絡を取るために席を外しますから。話が済んだら声をかけてください！」

そう言うと、榎島は奥の部屋へと入って行った。

### ▼KPCの願い

榎島のいなくなったリビングで、[KP]は一つため息を吐いた後、おずおずと口を開いた。

「……まえに『ずっとずっと、変わらず一緒にいてくれる？』って聞いたの、覚えますか？」

「自分で言っておきながらずっとっていつまでなんだろうって、考えてて」

「だって[P]は、わたしより先に死ぬでしょう。わたしはきつと、そういう死から、遠いところにいるから」

「……ひとりは寂しい」

「だから、どうにかできないか、榎島さんに相談してたんです」

「わたしが信仰するほどの価値のある存在なら、なにかできるかもしれないって」

「そうしたら、[P]を自分の眷属にすればいいって。眷属にすれば、わたしが死ぬまで一緒にいられるって、榎島さんが」

「これは、人間にはできないことだからって」

「……[P]には、家族がいるでしょう？なのに、こんな

一方的に、[P]を人の輪から外すのは、よくないって……

「……思ってたんですけど」

「でも、どうしても、貴方がほしい」

「こんな急に、ごめんなさい。でも本気なんです」

「お願い[P]、わたしのものになつてくれませんか」

【KP情報】人間にできない行いをする事で、人間ではない、神としての自覚をもち、存在を確立させようとしている。

ここは、イエス以外の選択肢はない。どれだけ人間と同じような思考を持っていたとしても、実際そうではないという部分の現れでもある。

●了承する

「本当？ 嘘じゃないですよね!？」

「嬉しい……。ありがとう、[PC]」

●拒否する

「……………」

「そうですね。こんなこと急に言われても、困ってしまいますよね」

「でも、ごめんなさい。わたしは、貴方が、どうしても欲しいんです」

「こんなこと、したく無かったんですけど」

そういうと、[KPC]はきみの腕を掴んだ。

目が合う。その瞬間、ふわふわと意識が揺らぎそうになる。

★KPCとPCのPOWを抵抗表で競わせる。

・PCが判定に失敗

[KPC]がきみの顔を覗き込んだ。

「ねえ、[PC]」

「一緒にいて。それだけでいいんです」

「ね？」

きみはその言葉に、当然のように頷く。

そうだ、否定するだなんて馬鹿げてる。

彼／彼女と共に在ることに、疑問なんてない。

そうだろう？

★以降は、[KPC]と一緒に生きる意思をもったRPを行う事となる。

・PCが判定に成功(特殊エンド)

きみはハツとして[KPC]を振り払い、離れた。

彼／彼女は、啞然としたように「どうして」と小さく呟いたが、きみは、その言葉になんと返せばいいのかわから

なかった。

ここにおいては、また何か干渉があるかもしれない。きみは咄嗟の判断で、榎島の家を出た。

戸惑いか拒否か、或いは、また別の理由か。

とにかく考える時間が欲しかったか、はたまた。

そうして、きみは自宅へと戻り、結局、何事もなかった一人夜を明かした。

翌日、帰らない[KPC]を不審に思ったか、心配になったか、とにかく何かしら気になる事があり、榎島の家を訪ねたが、榎島は[KPC]の行方を知らないという。

結局それから、いつまで経っても、二度と[KPC]はきみの前に姿を表さなかった。

---

END・0『泡になって消えるらしい』

「ハッピーエンドの人魚姫しか知らない」と、たしか、あの人魚は語っていたのだが。

【生還報酬】なし

【KP情報】[PC]が了承した。またはさせた状態で、話が落ちたら次へ。

話を終え、榎島を呼び出す。

榎島は、きみたちの顔を見比べるようにして視線を移し、笑みを浮かべながら頷いた。

それから、特にあれこれいうことなく「念のために送っていきますよ」と言い、きみたちの後を歩きながら、自宅までの道のりを共に歩いた。

道中は特に視線や気配を感じる事はない。

榎島は、自宅の前まできみたちを送ると、「やることがあるのだ！ ……期待してます！」と言いながら、足早にきた道に戻って行った。

## ▼海へ

[KPC]はそわそわと外を眺め、月が輝く夜を待っていた。そうしていくらか待って、漸く窓の向こうに深い暗闇が広がるころ、[KPC]はソファから立ち上がった。

「海へいきましよう。月が一番うつくしいから」

そう言うとき[KPC]は、どこからか非常用のランタンを持つてきた。

空いた片手で、そうつときみの手を握ると、海へと向かう。

外は殆ど無風だ。波は穏やかに打ち寄せて、煌々と輝く満月が、静かにみなもを照らしている。

ランタンをつけると、まるでスポットライトに照らされるかのように、君たちの周囲だけがぼんやりと明るくなった。

「PC」

囁くように[KPC]がきみを呼ぶ。

何か答えようと口を開いた。——その時だった。

何処かから、ぐちゃり、ぐちゃりと、ぬかるんだ砂地を踏み締める大きな音がした。

明らかに波の音ではないそれは、海の方から聞こえる。みなもに巨大な影ができていた。

思わず視線を向ける。[KPC]も息を呑んでそちらをみた。

そこには、<sup>①</sup>化け物<sup>②</sup>、としか言い表せないものがいた。

半ゼラチン状で楕円型の胴体からは、付属肢のような八本の太い腕が突き出ており、そのうち六本は先端にヒレのようなものがついている。残り二本は触手のようだった。

水かきのある四本の足がその奇形の体を支えており、迷いなくきみたちへと近づいてくる。

<sup>③</sup>見られている<sup>④</sup>。

実際に目があるう部分に目はなく、丸いスポンジのような器官があるだけだ。

その下には、楕円形の頭部の半周にわたって、口のような切れ込みがある。

その口が、がばりと開く。そして、複数ある触手をしながらせて、きみたちを害さんと迫った。

淵みに棲むものとの遭遇

S A N c 0 / 1 d 8

発狂した場合、その場に釘付けになってしまうかもしれないような極度の恐怖症で固定。

1ターンの行動不能。(KPの匙加減で緩和可)

戦闘開始

●淵みに棲むもの(マレモンP.100)

・耐久力 21

・DEX 13

・ダメージボーナス +2D6

・触手 35% 1d6+db

装甲は無いが、基本、通常の攻撃は無効化する。

### 【PL向け戦闘ルール】

淵みに棲むものは大部分の物理的ダメージを無効化する。脳組織にダメージを受けることでこのクリーチャーは即死するが、脳組織に命中する確率は10%である。これは、淵みに棲むものへの戦闘技能が成功した際に再度判定を行う。

この10%は条件によって補正が入る。

・銀のナイフを使う(+10% 持っていない場合、1R消費)

・KPCと約束した(+10%)

・燻んだ指輪を手に入れた(+10%)

・黄色いシーグラスを手に入れた(+10%)

この補正は一度きりではなく、戦闘中は持続する。

### 【KP向け戦闘の流れ】

戦闘開始直後、銀のナイフを持っていない場合、PCは「アイデア」

この判定はターン消費無し。この「アイデア」は失敗しても次のターンで再挑戦できる。

成功で銀のナイフを武器として使えるのではないかと思います。

取りに行く場合はPCはそのまま1ターン消費。DEX順は関係なく、離脱は宣言だけで良い。この間、淵みに棲むものは必ずKPCを狙う。

また、気絶した場合は必ず気絶した側を優先的に狙う。

庇う行為は不可とする。

取りに行かない場合や既に持っている場合は、通常通り戦闘処理を行い、PCまたはKPCの戦闘技能が成功する度に脳組織命中判定を行う。

この戦闘は

・ K P C の死亡

・ P C の死亡

・ 淵みに棲むものの死亡

のいずれかによって終了する。

### ▼淵みに棲むものを倒した

いくら攻撃せど手応えはなく、焦りだけが募る。——その時だった。

[PC]／[KPC]の攻撃が頭部へと当たると、その化け物は、形容し難い叫びをあげて砂浜へ倒れ伏した。

そうしてすぐに、べちゃべちゃと身体が分解され、あっという間に汚らしい染みだけを残して消えた。

【K P 情報】落ち着くまで軽いR Pをしたら次へ。

「[PC]」

[KPC]は「改めてきみへと向き直ると、そつと手を握った。

「誓ってくれるだけでいいんです」

「わたしと、ずつとずつと、変わらず一緒にいてくれる

？」

・ 頷く等の反応を返す

「絶対。約束ですよ」

いつか言った台詞を繰り返して微笑むと、彼／彼女はきみの唇へと口付けた。

乾いた身体に水が与えられるように、何かがじんわりと流れ込む。それは口から喉、胸元を過ぎて、やがて身体全体へとめぐった。

見えない何かで彼／彼女と繋がっているという、奇妙な感覚だけがそこにある。

[KPC]はきみから離れると、名残惜しそうに頬を撫でた。

見つめあつた瞳には、月の光が滲む。

おわりのない始まりを、月だけが見ていた。

月だけが、わかたれることのない、2人の夜明けを知っていた。

END.1『永遠を誓った日』

人魚を拾った事がある。

浴槽の縁に座って、自由や思い出を語った。

きみだけの人魚だった。

いまでもずっと、きみの隣にいる。

### 【生還報酬】

SAN値回復 1D6

### 【後遺症…KPCの眷属】

PCはKPCの眷属となった為、以降不死となる。

もし継続等でHPが0になった場合、1d20のSAN値減少の後にHPを全回復する。

支払うSAN値が無かった場合、肉体は生きているが応ロストにはなる。

もしKPCが死亡した場合、PCも共に死亡する。

また、脚等身体の一部に魚の鱗（または模様でも良い）が現れる。これは、KPCの眷属だという証である。

### ▼KPCのHPが0になった

いくら攻撃せど手応えはなく、焦りだけが募る。そうしているうちに体力の限界が訪れ、それを化け物が見逃すはずがなかった。

容赦なく振るわれた触手は、[KPC]の身体を容易く薙ぎ払う。

そして続け様に数度、叩きつけるようにして身体を蹴られ。[KPC]はびくりとも動かなくなってしまうた。

その様子を見た化け物は、まるで嘲笑うかのようにきみを見て、どう言うわけか、海の方へと戻って行った。

きみが駆け寄ると、[KPC]は最期の力を振り絞って、きみへと手を伸ばした。



「おねがい……[PC]」

「わたしのこと、たべて」

「そうしたら、ずっと、いっしょに……」

・ 食べない

「ああ……[PC]……[PC]……」

「……………さみしい」

そういつて、後はただ静かに、透明な液体となって溶けて消えた。

もうそこには、ただひとりの影しかない。

小さな海が頬を伝い、口の端へと流れ込む。

それが涙だったのか、[KC]の最後の一欠片だったのか、最早、きみにはわからなかった。

物語のおわりを、月だけが見ていた。

月だけが、2人の夜明けを知っていた。

(END.2へ)

・ 食べる

とろりと、水のように溢れ落ちてしまいそうな身体に、柔らかな月の光が反射している。

その光がやがて、[KC]の輪郭すら溶かしてしまう前に、きみはそつと口をつけた。

身体に流れ込むのは、記憶の一片。あの日の思い出。きみとの日々。

潮騒、水沫、塩水。きみによく慣れ親しんだ、うつくしい、いきもの。

厳かな儀式のようだった。

すぐえるだけすくって飲み干してしまえば、もうそこには、ただひとりの影しかない。

小さな海が頬を伝い、口の端へと流れ込む。

それが涙だったのか、[KC]の最後の一欠片だったのか、最早、きみにはわからなかった。

物語のおわりを、月だけが見ていた。

月だけが、2人の夜明けを知っていた。

END・2『月と水沫（みなわ）』

人魚を拾った事がある。

浴槽の縁に座って、自由や思い出を語った。

きみだけの人魚だった。

いまはもう、この海にはいない。

#### 【生還報酬】

SAN値回復 1D6

#### 【後遺症…人魚の祝福】食べた場合

PCは以降、生き物を食べ続ける限り不死となる。料理でも良い。

もし継続等でHPが0になった場合、1d20のSAN値減少の後にHPを全回復する。支払うSAN値が無かった場合、肉体は生きているが一応ロストにはなる。

また、脚等身体の一部に魚の鱗（または模様でも良い）が現れる。人魚にはなれない。

〔水泳〕を50%得る。成長しても、KPCが持っていた95%を上回ることはない。

#### ▼PCのHPが0になった

いくら攻撃せど手応えはなく、焦りだけが募る。そうしているうちに体力の限界が訪れ、それを化け物が見逃すはずがなかった。

容赦なく振るわれた触手は、きみの身体を容易く薙ぎ払う。

そして続け様に数度、叩きつけるようにして身体を撈られ。きみはびくりとも身体を動かさなくなった。

その様子を見た化け物は、まるで嘲笑うかのように

〔KPC〕を見て、どう言うわけか、海の方へと戻って行った。

〔KPC〕は、きみの元へと駆け寄ると、力なく倒れる身体を抱きしめた。

何よりも愛しむように、両腕を背に回して引き寄せる。

今にも途切れそうな意識の中で、耳に残るのはさざなみの音と鼓動。

僅かな視界の中に見えたのは、蕾が開くかの様に美しく解かれた彼／彼女の身体。透明な肋骨の花弁。

「ひとりば、寂しいから」

「ずっと一緒に」

月の光にきらめくそれは、[KPC]の腕と同じように、そう  
うっときみを抱きしめる。

とろりとした生暖かい感触と共に、彼／彼女と一つにな  
る以外道はない。

ぼたり、ぼたりと頬に何かが降り注ぐ。

口へ流れ込んだそれは、すこしだけ塩辛かった気がする。

物語のおわりを、月だけが見ていた。

月だけが、2人の夜明けを知っていた。

END 3 『月だけがしる別れの歌』

人魚を拾った事がある。

浴槽の縁に座って、自由や思い出を語った。

きみだけの人魚だった。

いまもきつと、この海のどこかにいる。

## 【両者ロスト】

### ▼真相

半神であるからか、その意思がないからか、KPCは他  
者をのぞんで眷属にすることはなかったが、信仰によつて  
神の血の力が徐々に強くなっており、信者も一部感知して  
いる。

イドラが自身の信者へ影響を与えるように、KPCもま  
た、無意識に信者へ影響を与えているが、KPCは気づい  
ていない。

そうして、街が少しずつ変化してゆく中、街に潜む深き  
物は、本来の信仰に影響が出るのではないかと危惧した。

今まで静観していたのは、KPCが街に居つかなかつた  
ことと、大した影響力がないと考えていたからだ。

そうしているうちに祝月（9月）の満月が迫り、KPC  
の力はより増していく。

「太陽と徒浪」でKPCはPCとずっと一緒にいたいと切  
望するようになるが、ずっと一緒に永遠とすると、PCを

自分の眷属にする以外に方法はない。

誰かを眷属にするという行為は、自分がどのようなものか自覚する行為でもあり、KPCをより確かな神話的存在へと昇華するおこないの一つでもある。

信仰と自覚。それらがKPCの存在を確固たるものにし、手に負えなくなってしまう前に始末してしまおうと淵みに棲むものの魔の手が迫る。

## ▼END後の話

### ●卓報告

エンド番号と生還報告のみでお願いします。

なんか間違えちゃっても大丈夫です。

例) END・1 両生還

### ●ロストした場合

あまりにも悲しい場合は、ロスト救済とかしてもいいと思います。

作者のシナリオにもロスト救済ができるものがあります  
が、これはあまりおすすめできないので、好きなものをどうぞ。

END・2の場合は、KPCが戻ってくる事になる為、PCは眷属の後遺症に切り替わります。

END・3の場合は、PCを逃さないように確実に眷属にされるかと思しますので、ロスト救済後、END・1の後遺症を負ってください。

### ●継続

他の作家さん&シナリオのご迷惑にならない範囲で、好きに継続で遊んでください。

KPCの人間姿もネタバレでは無いので、自由に公開してください。

ただ、PCの眷属化はネタバレになるので、どうにかこうにか隠してください。よろしくお願いします。

## ▼タイトルやエンド名

### ●きつと月だけがしるオーバード

オーバード (aubade) は朝の歌・朝の曲。夜明けに別れる恋人たちの詩や歌であったり、夜明けに関係する歌曲の事ともいわれています。

大元のタイトルは「月だけがしるふたりの別れ」という感じの意味あいになりますが、夜明けは希望のイメージもあります。

月だけが見ていた夜明けが、いずれ朝を迎える為の希望だったのか、別れを意味したのかは、二人のエンド次第ということになります。

#### ●太陽と徒浪

シナリオのイメージとしては、太陽はPCです。（モチーフ的な話をする、月はKPCになります）

徒浪は、穏やかな日常のはずなのに、なにか碌でもないことが起きている街の様子などを比喻しているの、タイトルとしてはそのままの意味です。

#### ・END・0 「泡になって消えるらしい」

「ハッピーエンドの人魚姫しか知らない」という話を実際シナリオ中にしていてもいなくても、何処かで語る機会はあるだろうという想定の方です。

#### ・END・1 「永遠を誓った日」

あの日は人魚を拾った特別な日。今日は、永遠を誓った

特別な日。

#### ・END・2 「月と水沫」

太陽と徒浪は、PCとささやかな事件の話。月と水沫は、KPCと物語通り水沫になる話

#### ・END・3

タイトル回収。

#### ▼その他の話

PL側からすると、人魚との楽しい日々みたいな感じですよ。

実際は、新しい神をつくろうとしていたり、どちらかというと、人魚が王子様を手に入れようとする話だったり

……。幸せならオーケーですね。

また、部分的に、既存の銀食器シナリオのオマージュ？のような部分があります。ピンときたらすごい。

割とどうでもいい話だと思うので、また思い出したら適当にふせつたーでも認めます。

いつか続編や関係のあるシナリオを書こうと思っている  
ので、その時はまた、よろしくお願いします。